

青雲の果て

— 武人黒田清隆の戦い —

第5回

奥田 静夫

フリーライター・開拓史研究家

第3章 戊辰戦争（続き）

庄内和平成る

長岡城の攻略後、清隆は米沢藩の帰順工作をこなし、明治元年（1868。この年9月8日「慶応」より「明治」と改元）9月中旬、米沢藩主上杉茂憲に庄内征討の先鋒を命じた。

次いで清隆の率いる部隊は、庄内藩の本拠地鶴岡を包囲した。

23日、庄内藩の軍使吉野遊平が清隆の陣営にやって来て、降伏嘆願状を提出した。

清隆は人払いをして吉野を引見した。このときの清隆の言葉、態度はきわめて温和であったので、吉野は意外の感に打たれた。

庄内藩は17万石格で、藩主酒井家は徳川将軍家と同祖であることを何よりも誇りとしていた。また幕府から「江戸市中の警護」を預かっており、そのために藩の配下に「新徴組」という浪士隊を抱えてもいた。

しかも庄内藩兵はきわめて精悍で、薩摩藩邸焼き討ち事件で主役を演じたのをはじめ、これまでの近隣諸藩との戦いでも連戦連勝を誇り、幕府側勢力にとっては、会津藩とともに中心的な存在であった。

したがって薩長主体の新政府軍からみれば、まさに“不倶戴天の敵”とあってよかった。

その庄内藩の代表たる軍使に対して、清隆は藩主の謝罪、武器提出の比較的穏やかな二条件を示した。

吉野は、

「直ちに持ち帰って藩上層部と相談するので、二日間の御猶予をお願いしたい」

と答えたところ、清隆は、

「よろしい。手違いのこともあろうから、さらに1日を与えましょう。その間、わが方は休戦を約束する。休戦の保証人として、自分みずからが貴殿と同じ船で貴藩に赴くことではどうか」

と提案した。

吉野は、みずから人質になろうという清隆の度量に驚き、その必要がないことを申し述べた。

次いで清隆は、

「酒井家の存続は疑わなくてもよい」

といった。

実は、このひとことが、庄内藩全体のもっとも期待していたところであった。

吉野は狂喜し、心から安堵して帰藩していった。

26日、清隆は庄内藩校致道館に乗り込み、陣を張った。そこへ庄内藩主酒井忠篤が、父忠発とともにやって来て、慇懃に謝罪した。

このとき、忠篤はまだ15歳の少年であったとはいえ、30歳にも満たない清隆に、17万石格の大名が頭を垂れたのだ。

清隆は、柔和かつ丁重な態度で庄内藩の降伏を認めた。

翌日、清隆が師とも仰ぐ西郷隆盛が鶴岡に入り、藩主の正式な降伏を受けた。西郷も、どちらが降伏者かわからないほど、相手に気を使った。

庄内の人々は、このとき以来、すっかり西郷と清隆に心服した。とくに西郷は、彼らの心の中で大きく崇敬される存在となった。

のちに、庄内生まれの徳富蘇峰は、次のように

西郷、清隆や薩摩

人を称えている。

「薩人は敵と戦う

ときにも、他日其

の敵と握手す可き

場合を決して忘却

しない。…西郷、

黒田が庄内藩に対

する寛大な処分の

如きも、亦其慣用

手段を用いたるに

他ならなかった。

薩人としては庄内



酒井忠篤（致道博物館蔵）

藩に向かって含む所あるべきは当然だ（注・薩摩藩邸焼き討ち事件）。然るに其の帰順に際し、百方弁護し、十二分に好意を表したるは実に薩人だ。これ庄内藩に取っては全く思ひ設けぬ事であって、其の感激したのも当然と言はなければならぬ」（徳富蘇峰「近世日本国民史・75」）

越後方面での山県有朋との暗い確執、そして苦戦。それに比べて庄内の和平工作は、まさに快心の出来であった。このとき清隆は27歳であった。

戦後、庄内人で西郷や清隆を頼るものがあつた。のちに清隆のもとで開拓使の大判官として活躍する松本十郎も、その中の一人であった。

清隆が東京に凱旋したのは、11月4日であった。ときに朝廷は都を東京に移し、街にはその隅々まで新しい気分が満ち溢れていた。

しばらくして、庄内藩家老菅実秀が、庄内和平のときの御礼言上にやってきた。

清隆は笑顔で応対し、

「自分は万事、西郷の指示どおりにやったまでだ。すべての功労は西郷にある」

といった。西郷の薫陶を受けてここまで来た清隆の、本心から出た言葉であった。

第4章 箱館戦争と榎本助命

宮古湾海戦前の忠告

清隆は、庄内和平が成ったのち、郷里の鹿児島に帰った。

話がややさかのぼるが、この年の4月、新政府は、徳川政権に引き続き蝦夷地（北海道）を統治するため箱館裁判所を設け、清水谷公考（公家）を総督としていた。

このころは政変で禄を失う士族が多かったので、これを救おうと、6月、旧幕府は徳川家達の名で蝦夷地の開拓を出願した。しかし新政府はこれを許さなかった。

一方、旧幕府海軍には、副総裁榎本武揚（釜次郎）がいて、勝海舟の江戸城開城を大いに不満として、艦を下りる気配はなかった。

このころ、奥羽列藩同盟の勢力から榎本のもとに、しきりと援兵を請う動きがあつた。

榎本は徳川慶喜や家達が駿河に落ち着くのを見届けると、8月19日、幕命に背いて品川沖から開

陽、回天、^{ばんりゅう}蟠竜、千代田形など艦船8隻を率いたまま、北上した。榎本は、奥羽の救援とともに蝦夷地への移住を目指したのであり、勝海舟の反対を押し切つての行動であった。

艦隊は途中、暴風雨に妨げられ、仙台湾に集結した

のは、9月も半ばを過ぎていた。その間に奥羽諸藩は各個撃破され、わずかに庄内藩を残すのみであった。

その庄内藩も9月27日には降伏した。連絡のため庄内藩の松本十郎が仙台にやってきたが、榎本は、

「いまとなつては、最後の艦までも戦うしかない」

と決意をあらたにしながらも、落涙した。

榎本軍が仙台に入港したことを聞きつけて、奥羽救援に出陣していた旗本脱走軍、会津や仙台の脱走兵などが続々と集まり、その数は2千5百人に達した。しかもその中には、旧幕府軍歩兵奉行松平太郎、陸軍奉行竹中重固、歩兵奉行並大鳥圭介、新撰組副隊長土方歳三など、世に勇名を馳せた人物が多く含まれていた。

彼らと協議した結果、先に請願した蝦夷地開拓の志を達成するために、ひとまず箱館に拠ることに決つた。

10月13日、榎本らは南部（岩手県）の宮古湾に移り、16日にはこの地を発つて北海道に向つたが、このとき榎本は、徳川脱藩海陸軍一同の名で政府宛ての建言書を書いている。

その中には、

「蝦夷地を開拓し、あわせて北方防衛について皇国に忠勤を遂げたい。蝦夷地を徳川家に『永久御預り』にしてほしい」

と書いている。

いわば、駿河府中藩の分領として、この地を与えてほしいとの要求であった。

10月20日、榎本の率いる艦隊は、函館から40キ



榎本武揚（国立国会図書館蔵）

口余り離れた噴火湾岸鷺の木に上陸し、箱館を目指して進んだ。

北国の冬の訪れは早く、あたりにはすでに雪が散らついていた。

箱館裁判所は「箱館府」と改称されていたが、知事の清水谷公考は部下とともに青森に退避していたので、榎本らの軍は、難なく箱館五稜郭を占領した。

さらに松前城を陥れ、一隊は松前藩主松前徳広のいる館城を攻撃した。徳広は弘前に逃れ、松前藩兵約5百人は降伏した。

ただ、榎本軍の虎の子ともいえる軍艦開陽が陸軍の応援に向かう途中、江差沖で座礁・沈没し、行く手に暗雲が漂いはじめた。

蝦夷地は榎本らの支配下に入り、榎本らは、「合衆国の例に倣い、仕官以上の者をして入札せしめ…」(小杉雅之進「麦叢録」)

つまり役職者の選挙を実施した。

こうして蝦夷島総裁榎本武揚をはじめ、副総裁松平太郎、海軍奉行荒井郁之助、陸軍奉行大鳥圭介以下のそうそうたる布陣が決定した。

12月14日、箱館駐在の各国領事に対しても、新政権の成立が告げられた。

ここにおいて新政府は、大久保利通の案によって、徳川家達に命じて榎本を討たせようとした。これはまもなく、慶喜の弟昭武に代えられたが、これまた酷過ぎるきらいがあるとして中止した。

そこで清水谷公考に青森口総督を兼任させ、薩長の俊秀を参謀に任命して、明治2年の春を期し、一斉に討伐を開始することに決定した。

そのころ、清隆の郷里、鹿児島では、凱旋した薩摩兵が増長して、その横暴は目に余るものがあった。このため薩摩藩は明治2年2月、職制を改めて西郷隆盛以下を参政に就任させ、これを鎮圧する策を採った。

この前後、清隆は、徒食の青年たちの取り締まりにあたり、夜学校を興して修養につとめさせていた。

そのかたわら、時たま上京して、大久保利通や木戸孝允に対し箱館追討策で建言したりした。当時、木戸が清隆に与えた書簡では、木戸は清隆の説を軍務官(兵部省の前身)大村益次郎に伝えようとしたが、すでに清隆が大村を訪れていたの

云々とあるから、彼が各方面に奔走していたことがわかる。

まもなく清隆は、青森口征討総督の清水谷公考の参謀として発令された。

3月9日、清隆らの部隊を乗せた軍艦甲鉄、春日、丁卯、陽春と輸送船飛竜など、計八隻の船団が品川を発ち、北海道の箱館に向かった。清隆自身は、軍艦春日に乗り込んでいた。

18日、船団は南部(岩手県)の宮古湾に錨をおろし、ここで疲れをやすめた。

このとき清隆は、海軍参謀増田虎之助(明道、長州)に、

「夜襲を警戒すべきだ。湾内に哨戒船を出しているか」

としきりに尋ねた。奇襲攻撃を得意とする清隆の第六感であった。

このことをめぐって深夜まで激論した。しかし増田は、

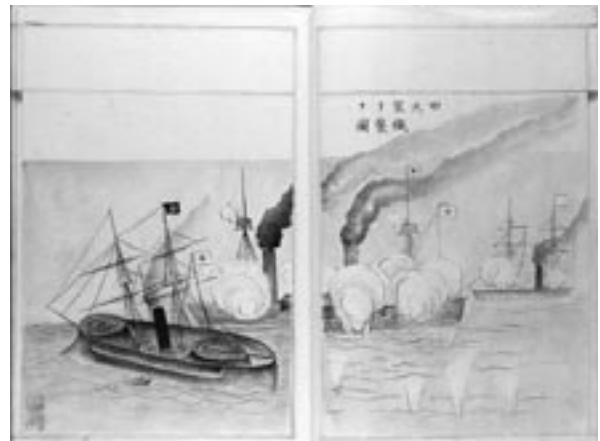
「陸軍のくせに、海軍によけいな口出しは無用だ」と突っぱねた。

やむなく清隆は、春日の艦長赤塚源六に対し、警戒を怠らぬよう注意を喚起するにとどめている。

一方、箱館にいた榎本軍の中樞では、まさに清隆の懸念していたとおり、回天、蟠竜、高雄の三隻で南部の宮古湾に停泊中の新政府軍船団を奇襲することを計画していた。

奇襲軍の司令官には荒井郁之助、艦長には甲賀源吾、突撃隊長には新撰組の土方歳三を予定していた。

翌朝、宮古湾を奇襲しようとしていたが、運悪



蝦夷錦「回天装鉄ヲ襲フ図」(函館市中央図書館蔵)

く途中の風浪に妨げられて三隻は離れ離れになり、作戦は不可能になったかと思われた。

しかし彼らに戦機は今しかないとの思いは強く、激論の末、ついに回天一隻で宮古湾への奇襲攻撃を敢行するという結論になった。この回天は二本マストで、プロシアで造られた排水量1678トンの木造外車船であった。

3月25日午前4時半過ぎ、回天は星条旗を掲げて、音もなく宮古湾に進入していった。

そして突然、星条旗に代えて日章旗を掲げると、大胆にも新政府軍船団の主力艦甲鉄の横腹に接舷して乗りかかっていった。

この甲鉄はフランス製で、アメリカから新政府に引き渡された、やはり2本マスト、排水量1358トンの木造ブリック・ラム付装甲艦であった。

しかし回天の甲板は、敵艦甲鉄の甲板よりかなり高く、抜刀隊はなかなか敵艦に躍り込めなかった。

そのうちに甲鉄艦では備砲を乱射し、汽かんに火を入れて運行を開始した。清隆の忠告を聞いて警戒していた春日も、すぐさま応戦した。

さすがの榎本軍抜刀隊も近くの敵艦からの猛射にひるみ、回天艦長の甲賀源吾も甲鉄甲板上のガットリング砲の弾にあたって戦死した。

形勢は榎本軍に決定的に不利となった。

やむなく荒井は、残兵を收容して撤退を命じ、回天はすばやく港外に姿を消した。

この間、わずかに30分程度に過ぎなかったが、稀に見る、海上での激しい接近戦であった。この海戦で、榎本軍は死者15人、負傷者7人を出した。

翌26日、回天は箱館に帰投し、政府艦隊も青森に集結した。

春日の砲術士官をつとめていた東郷平八郎（のちの日露戦争時の連合艦隊司令官、薩摩）は、後年、「陸軍参謀黒田清隆は深謀ありし人なりし。回天来襲の前夜、海軍側に向い、敵艦侵入し来るやも測らざれば、哨艦を港外に出すべしと忠告せり…翌朝果して襲来し、予等は黒田の慧眼に敬服せり」と清隆をほめ讃えている。

箱館戦争に参戦

明治2年（1869）4月9日、新政府軍は、江差の北の乙部に上陸した。

そこから主力は海岸を江差へ、支隊は山道を館

城へ、また小部隊は北方の熊石に進撃した。

対する榎本軍は、箱館に千余人、松前に6百人、江差に3百人、その他森、室蘭にも少数を配置し、総勢3千人ほどであった。

新政府軍は、海上からの援護射撃に守られて江差を通り、ここで1隊を山道から箱館の西の木古内に向けて進攻させ、他は松前を目指して海岸沿いを進んだ。

このため榎本は土方歳三を梅濱峠に出して山道軍に当らせ、大鳥圭介をも木古内に出して応戦した。

榎本軍は士気がきわめて旺盛で、新政府軍の進攻も容易ではなかった。山田顕義参謀（長州）は、「奥羽の戦闘よりはるかに激しい」

といて、しきりに援軍の派遣を求めた。

そこで増田虎之助の指揮する第2軍を江差に揚陸することになり、4月13日、二股の土方隊に対して16時間に及ぶ猛攻を加えた。

しかしそれでも抜くことができなかった。

ここにいたって、清隆は第3軍約2千人を備船アラビオン号、ヤンシー号に分乗させて、16日江差に上陸し、各戦線で増強した。

翌日、松前城を奪取し、さらに木古内に達して大鳥圭介の軍と対戦したが、窮地に陥り後退した。

しかし大鳥も兵力の消耗が大きいのを知って、要所を残し、密かに箱館に引き揚げた。

23日、新政府軍は二股を強襲して、白兵戦を繰り返したが、ついに双方にらみ合いの状態となった。

そのうち榎本軍の食糧、弾薬などの物資は次第に欠乏し、兵員も減少して数で新政府軍に押され、撤退せざるを得なくなった。

5月に入ると、戦線はようやく箱館を中心とする地域に圧縮されるかたちとなった。箱館は兵火の前に晒され、新政府軍の攻撃目標は五稜郭や弁天砲台に絞られた。

新政府軍の総攻撃の日は、5月11日と定められた。

profile

奥田 静夫 おくだしずお

1943年福井県生まれ。金沢大学法文卒。北海道開発局官房長、(社)北海道建設業協会専務理事を経て、フリーライター・開拓史研究家。一道塾会員。札幌市在住。2006年3月、「魂を燃焼し尽くした男—松本十郎の生涯」で第26回北海道ノンフィクション大賞受賞（雑誌「クオリティ」同年4～12月号連載）。
